

1万本のキャンドルに想いをこめて 被災地を「応援」

—『特定非営利活動法人 被災者応援愛知ボランティアセンター』—

2018年もまた、地震や台風、豪雨などの大きな災害が日本列島を襲いました。被災地は多くの悲しみに包まれ、現在も不自由な生活を余儀なくされている方が数多くいます。特定非営利活動法人 被災者応援愛知ボランティアセンターは、東日本大震災発生直後に設立されて以来、被災された方々に寄り添い元気づける応援活動を続けています。今回、3月11日の追悼式典で灯す追悼キャンドルの作製会場を訪問し、専務理事の田中涼子さんに活動の背景や想いなどについてお話をうかがいました。

キャンドルに想いをこめて

毎年3月11日に開催される「東日本大震災犠牲者追悼式あいち・なごや」は、2019年で6回目を迎える。実行委員会を構成する団体の一つである特定非営利活動法人 被災者応援愛知ボランティアセンター(以下、「愛知ボラセン」)は、追悼式の企画・運営のほか、会場で灯す追悼キャンドルの作製も担当している。

この追悼キャンドル、もともとは、愛知ボラセンが独自に開催していた追悼イベントにおいて、震災で亡くなった方と同じ数のキャンドルを灯して追悼したのが始まり。当時、一団体でそれだけの数のキャンドルを作製するのは無謀だという声もあがったとのこと。それでも、それだけ大変なことが起こったのだからやり遂げようという声に背中を押され、ボランティアと力を合わせて15,000本を超えるキャンドルを灯した。(2011年10月26日時点の警察庁広報資料によると、死者数は15,829名)。

その後、愛知ボラセンのように被災地を応援する活動を展開していた個人や団体が集まり、一年に一度、3月11日に、亡くなった方々の追悼イベントを合同で開催しようということになり、現在の姿となった。会場の制約等もあり、2018年の追悼式典に向けて愛知ボラセンが作製したキャンドルは1万本。活動日数34日、延べ449人のボランティアの手によって作製された。2019年も同じく1万本を目標に、10月から作製を開始している。

もちろん、1万本のキャンドル作製は簡単なことではない。しかし、だからといって目標達成のために、効率良く作ることは考えていないと話す田中さん。ある日、ボランティアの方から「材料を家へ持って帰って作ってきてもいいですか? そのほうが効率いいですよ」と言われたことがある。とてもありがたいと思いつつも、丁寧に断りたと言。「このキャンドル作製が、作業になってはいけないと思っています。たくさんの方と一緒に作りたい、一つの会場に集まってみんなで場を共有しながら、想いをこめて作りあげていきたいんです」。

ボランティアが主体となって

原則毎週火曜日と土曜日に行われる追悼キャンドルの作製。平均して毎回10名程度のボランティアが参加する。田中さんは毎回立ち会おうが、活動の主体はあくまでボランティアの皆さん。初めて参加するボランティアの方にも、活動の趣旨や全体の流れを説明するくらいで、田中さんがあれこれ指示をすることは無いと言う。作製のためのマニュアルも存在しない。ボランティア同士が教え合い、作製方法や手順などを工夫しながら活動が進んでいく。

「私たちの団体は設立の時から若いスタッフがなくて、きつとどこか頼りなかったのだと思う。だからその分、ボランティアの方々が一生懸命に取り組んでくださるんです」と笑って話す田中さん。謙遜ともとれるが、ボランティアの方々に

キャンドルのおおまかな作製のながれ



信頼しているからこそその言葉とも感じた。

「何かお手伝いしたいと思って来た方に、気持ちよく活動してもらいたい。作業員ではないわけですから。来てよかったと思ってもらいたくて」。だからこそ、信頼して任せるといふ。また、ボランティアの方には、好きな時間に来てもらえばよく、予約や事前連絡の必要なし、来る予定が急遽来られなくてもいいという。このゆるさ、自由さが、かえってボランティアの主体性を引き出しているのかもしれない。実際、一度ボランティアに参加した方が、その後リピーターとなって足を運んでくれるケースが多いそうだ。

取材当日、偶然にも『ボラみみ』の募集記事を見てこのボランティアを始めたという方に会うことができた。お話をうかがったところ「参加していて楽しいです。被災地の支援については、これまで寄付はしてきたけど、もっとなにかできないかと思って...キャンドルを作製するという具体的な活動に参加できて嬉しいです」。

東北の子どもたちに寄り添い続ける

愛知ボラセンのルーツは「愛知県高校生フェスティバル実行委員会」。田中さんは高校生の時に、仲間と一緒に、世界各国の高校生との交流イベントやボランティア活動などに取り組んだ経験を持つ。こうした背景から、愛知ボラセンは田中さんたちにとって身近な存在である、学生や子どもたち、特に震災孤児・遺児への応援に大きな力を注いできた。

その一つである「でらええ〜友だちつぐっぺえ〜笑顔プロジェクト」は、震災孤児・遺児同士の交流の機会を設けて、同じ境遇の子ども同士がそれぞれ抱えている気持ちを打ち明け、受け止め合えるような仲間と出会える場所をつくることを目的に、愛知県の学生が中心となって企画・運営している。2018年8月の開催で12回目を数えた。

「今の私にとって、ここは安心して泣ける場所」「ここにいるのは家族みたいに大切な友だち」これまでに参加した東北の子どもたちの言葉だ。抱えきれない悲しみ。打ち

明けられない苦しみ。みんな違う状況にあってそれぞれ違う想いをもち、多くの子どもたちが我慢している。そしてそれは、震災から8年が経とうとしている今でもほとんど変わっていないと田中さんは言う。「これからも東北の子どもたちに寄り添っていきたい。そして、この子どもたちのことを少しでも伝えていけたら...」

「支援」ではなく「応援」

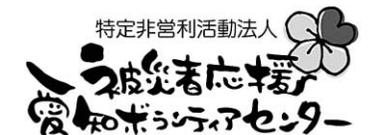
愛知ボラセンは、自分たちの活動を「支援」ではなく「応援」活動という。「支援という言葉は『支えてあげる』『何とかしてあげる』という感じ。私たちにはそんな偉そうなことはできない。私たちは、同じ立場、家族や親戚のような感じで、『がんばろうね』『応援してるよ』という想いで活動しています」

被災者に対し、仲間として、家族や親戚に接するように、励まし応援し寄り添う。仲間として信頼し、想いを共有するボランティアの方々とともに。

取材後、キャンドル作製を少しだけお手伝いさせてもらった。田中さんや周りのボランティアの方々のおかげもあって、初めてなのに落ち着いた心持ちでキャンドル作製に取り組めた。愛知ボラセンの温かさや懐の深さ、優しさを感じ、「応援活動」の一端に触られたような気がした。

Information

追悼キャンドル作製のボランティア募集中!
詳しくは9ページをご覧ください!



特定非営利活動法人
被災者応援
愛知ボランティアセンター
名古屋市熱田区沢下町8-4(愛知私学会館内)
TEL:052-990-8966(10:00~17:00)
携帯:080-4530-3117(10:00~17:00)
E-mail:aichiborasen@gmail.com

「東日本大震災犠牲者追悼式あいち・なごや2018」の様子

